
うささんと、ちょっとだけソクッてした話

uyr yama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うささんと、ちょっとだけゾクッとした話

【コード】

N8739T

【作者名】

u y r y a m a

【あらすじ】

2匹のペットにかこまれた、勤労学生のお話、第二弾。

夜、唐突に目が覚めた。

目をこすりながらベッドに備え付けられているスタンドのライトをつけ、目をこすりながら時計を見た。

針はAM2:00ジャスト。

起きる予定の時間よりも、5時間以上は早い。

布団を頭までかぶり、もう一度寝ようかと目をつぶるが、なんとなくに布団から出て冷蔵庫のある台所に足を運んだ。

最近お気に入りのミカン成分の入った水で喉を潤し、せつかなんでついでにトイレをすませた。

ジャーツと水を流し、妙にスッキリした気持ちでトイレから出ると、最初の一步目で足の裏がぶにとなんだか柔らかい感触。

やべえっ!?

勢いよく身体を前傾体勢に持って行くと、今踏みそうな柔らかい物体から足をどける。

間一髪とあっていいだろう。

うまい具合、それを踏みつぶすのを避け、だけでも体勢を崩した俺はそのまま床に転んだ。

ドシンッと結構いい音を響かせた俺は、下の階に響いただろうな…と心の中で下の階の人に詫びつつ、ぶうぶう鳴きながら転んだ俺の脇の下に潜り込んできた柔らかい物体の頭をガシツと掴んだ。

「うっさく、おまえってヤツわ……」

痛む背中と膝頭。ドクンドクンと激しく鼓動を繰り返す心臓の音。

恨みの籠もったその台詞に、だけでもうささん、そんなの俺には関係ねえ、とばかりに撫でる撫でるとせがんでくる。

仕方ないな……と多分俺は苦笑してたんだろう。

上体起こしつつ、大きいため息を吐くと、ゆっくり優しく耳のある頭からお尻まで撫でた。

それを何度も繰り返しながら、うささんの寢床であるゲージに視線を送った。

……突然だが、こんな話がある。

俺の母親の話だ。

母が小さい頃、今はもう死んでしまった祖父にせがみ、ようやくの思いで買って貰った子犬がいた。

母はその子犬が大好きで、だけでもその子犬は飼ってから一週間もしない内に亡くなったのだ。

それが、母のトラウマである。

どうしてか？ と言えば、妙に人懐こかったその子犬。

夜に母の布団の中に潜り込み、そのまま母に押し潰されて……

朝起きた母の下には、押し潰されてお亡くなりになった子犬が一匹。

そりゃートラウマにもなるよ。そう思った子供の頃の俺。
ペットを決して飼うことのない、我が実家の話である。

まあ、そんな訳で、子供の頃から動物好きな俺は、だがしかし、こうして一人暮らしをするまでペットを飼ったことはなかったのだ。大学の入学に合わせ、ペットOKのマンションを探し、ついに念願の初ペット、うささんを家族として迎え入れた。
その内に、大学で出来た友人の猫が出産し、貰い手のなかった一匹の子猫……ねこさんを引き取り、今の我が家がある。

そして、そんな我が家の鉄の錠が、夜寝る前にゲージにしつかりとうささん、ねこさんを入れてから寝ることだったんだけども……

いったい何があったんだろうか？

天井の部分が半壊し、何故かうささんゲージにねこさんが眠っている。

ねこさんゲージはもちろん空っぽだ。

こちらも天井の部分が半壊している。

なに？ ジャンプして頭突きでもしたのっ！？

朝にケージの天井部分がずれてることは確かにあったけど、こんな状況初めてよっ！？

そんな感じで、ちょっとリアルにポルポル状態だった俺だったのだけども……

不意に、本当に不意に、うささんが俺の撫でる手から逃れて、玄関に身体を向け、二本足で立った。

ジツと視線を固定させたままのうささんに、何だろう？　と思いな
がらも手を伸ばし、再びうささんを撫でようとしたその時だ。

うささんが、タンタンっと床を叩く。

何度も、何度も。

身体を触れれば、いつもはダラ〜っと柔らかい身体が、緊張してい
るのか、とてもピシツと引き締まっている。

しかも、決してこちらに関心をよこさず、タンタン、タンタン、と
ひたすら繰り返すだけ。

初めて見せた、そんな様子に、俺は理由の良く解らない恐怖に駆ら
れ、急ぎうささんを抱き上げる。

だけでも、腕の中で暴れ倒すうささん。

こんな反応も初めてで、思わず俺はうささんを逃がしてしまうのだ
けども。

うささんは再び玄関を向いて2本足で立ち上がると、タンタン、タ
ンタン……

気づけば寝ていたねこさんも起きて、けどもこちらはゲージの中
で身を縮こまらせていた。

……あれ？　もしかして何かいるの？

そう思った瞬間、背筋がゾクゾクとした。

たぶん、鳥肌が出ていただろうとも思える。

俺は急ぎベッドに飛び込み、鉄の掟も気にせずに布団を頭まで被っ
て目をつぶる。

タンタン、タンタン……タンタン、タンタン……

うささんの鳴らす床の音を聞きながら、気づけば意識は夢の中。

朝起きたらうささんも、ねこさんも、いつもと同じ甘えん坊。

深夜の床叩きなんてまるでなかったように……

その日、行った大学で、教授にその話を披露したら、ウサギのそれは警戒。

群れの仲間に危険を知らせると同時に、危険の対象に対しての威嚇だと。

一体、ナニに警戒していたのか？

そんな、ちょっとだけ怖かった深夜のお話。

……に、しても思っただが、もしかしてウチのリーダーって、うささんなのか？

ねこさんがうささんに絶対服従してる様に、そう思った俺だった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8739t/>

うささんと、ちょっとだけゾクッてした話

2011年10月7日00時31分発行